

「人間－自然系」の生活知を用いた社会文化的な環境評価軸の検討
－釧路湿原東部湖沼流域の＜環境問題＞および人々と自然とのかかわりを事例として－

Socio-Cultural Environmental Index with Life Knowledge

Created in Human-Nature Relations

学籍番号 56879

氏名 二宮 咲子 (Ninomiya, sakiko)

指導教員 鬼頭 秀一 教授

第1章 協働を模索する＜環境問題＞の現場から

日本最大の湿原である釧路湿原流域の自然再生事業は、行政機関や専門家に加えて、住民やNPOを含む様々な関係者による自然再生協議会を法の下に設置し、協働による自然再生の実現を政策理念として掲げている点に特徴があり、「自然再生釧路方式」はその先進モデルとして注目を集めている。ところが、「協働による自然再生の実情」について、行政機関や関係団体からは、「都市部の住民が自然再生協議会の個人構成員の大半を占め、実際に自然再生事業を実施する地域の住民の参加はほとんどない」という悩みの声が共通して聞かれた。その理由については、「自然再生協議会の科学的・専門的な議論に地域の住民が加わり理解することは難しいのではないか」、「自然の近い地域に住む人々の＜環境問題＞への関心が低いからではないか」等の見解があった。一方、自然再生事業が実施される現場近くの地域住民への聴き取り調査からは、決して環境問題に対して無関心ではなく、むしろ、「行政や専門家はここでは何が本当に＜環境問題＞なのかを結局何もわかっていない」という不満や不信感を持った地域住民の声が聞かれた。

協働による＜環境問題＞の解決を目指す釧路湿原流域の自然再生事業の現場において、地域住民の自然再生協議会への参加を阻害している要因は何か。

「行政や専門家はここでは何が本当に＜環境問題＞なのかを結局何もわかっていない」という声は、科学合理的な文脈とは異なる文脈によって、地域住民にとって認識されている＜環境問題＞に対して、専門家による学問的探求が不足し、行政が眼差しを向けてこなかったことへの反省を迫るものとして、受け止めるべきではないだろうか。＜環境問題＞の協働による解決を模索する現場では、解決手法の科学的な合理性を高めることだけでなく、価値観の問題を含めて、＜環境問題＞の現場や現実の視点から地域社会の生活を分析し、社会的な合理性のある解決策を導くための学問的探究が求められているのではないだろうか。そこで、協働による＜環境問題＞の解決を模索する政策的・社会的取組みの現場において、地域住民にとっての社会合理的な文脈における＜環境問題＞の状況の分析方法を検討するために、自然科学的手法では分析が困難な、地域の歴史や文化的な背景を伴う価値観の問題を分析するための社会文化的な環境評価軸の検討を研究目的とした。

第2章 <環境問題>の社会合理的な文脈への接近のための理論的基盤

地域住民の価値観の位相を含む<環境問題>の社会合理的な文脈への接近のための理論的基盤を検討した。まず、人間と自然との倫理的な関係性を考究するための概念として和辻哲郎が提起し、オギュスタン・ベルクが批判的に継承してきた「風土性」の概念から検討を始めた。風土性の視点からの、「人間－自然系」の生活知を分析する視座への示唆は、自然を近代科学のように物理的な客観性の文脈からのみ分析対象とするのではなく、また個人の印象といった主観性の文脈からでもなく、主体としての人間との相互作用の対象としての通時的な自然とのかかわりという文脈への着目である。また、その分析方法としては、研究者個人の主観的／直感的な印象に頼るのではなく、社会学や人類学などのフィールドワークに基づく社会調査方法論に依拠し社会科学的な学問的探求力を保つことである。

次に、「人間－自然系」における地域住民の自然とのかかわりの具体的様相を分析した先行研究をレビューした。生活環境主義が先駆的であり、地域の実状や暮らしの現状に合わせて人々が自然とのかかわりの中で工夫してきたことをフィールドワーク（現地での聞き取り調査など）から、環境問題の解決策として論理的整合をもたせることを企図する研究の立場を確立した。また、環境社会学や森林政策学におけるコモンズ論は、住民による資源管理という政策論との親和性を持って具体的な担いの仕組みを明らかにし、ルールをもった共同のかかわりを分析する際に重要な具体的な視点を多く提示した。コモンズは重層的であり、動的であり、幅のある社会的承認のしくみによってコモンズが支えられているという視点である。地域において自然資源管理の社会的承認を獲得するプロセスは、「だれが、どんなルールで、どんな中身で」かかわり、権利は所与のものとしてあるのではなく、組み立てられたり、崩されたりといった「誰によってどう認知・承認されているか」といった側面のダイナミズムに注目しなければ解き明かすことはできない、という分析視点は示唆に富む。次に、「人間－自然系」における倫理的課題の分析を可能にする理論をレビューした。鬼頭秀一の社会的リンク論によって、環境問題の本質は「人間－自然系」における人々と自然の統合的な関係性の分断（「切り身化」）にあること、そして、分断された経済・社会的リンクと精神・宗教的リンクを再度つなぎ合わせること（「生身化」）が環境問題の本質的な解決に繋がるという倫理的な規範軸を示す分析理論が示された。丸山康司によって人間－自然系相互変化モデルへの展開もみられ、概念軸として社会的リンク論が示す文化的価値と経済的価値を採用し、実証的な作業領域として「知識」「環境」「技術」「制度」を新たに設定することで、人間と自然の関係性を論じる諸概念を特定の要素に還元し尽くしてしまう危険性を回避しつつ動的な関係性の中に位置付け、社会的リンクの現状を具体的に把握し、構築すべき社会的リンクの発見を可能にする分析視点が提示されている。

風土性の概念を基本的視座とし、生活環境主義、コモンズ論、社会的リンク論、人間－自然系相互変化モデルなどの分析理論によって、地域の歴史や文化といった社会合理的な文脈にある<環境問題>という研究領域が確実にひらかれつつあることが明らかとなった。

第3章 「人間－自然系」の生活知を用いた環境評価軸の検討——釧路湿原塘路湖流域の <環境問題>と人々と自然とのかかわりを事例として——

釧路湿原の自然再生事業を事例として、<環境問題>の認識のズレが生じた過程の詳細な分析を行った。自然再生事業の実施地域に生きる人々にとってのもうひとつの<環境問題>とは何かについては、文献資料および聞き取りによる質的調査法によって釧路湿原東部の塘路湖流域の自然と人々とのかかわりの変容を事例として通史的に分析した。特に、代表的な生業活動である漁業に従事する地域住民への塘路湖とのかかわりについてはより詳細な聞き取り調査を行ない、これらの結果を用いて「人間－自然系」の生活知を用いた環境評価軸の検討を行った。

表 1. 研究対象，着眼点及び研究手法

	研究対象・着眼点	研究手法
釧路湿原 (塘路湖) 東部湖沼	<p>●人々と自然とのかかわりからみた社会文化的な環境評価軸</p> <p>(1) 社会的・経済的側面 生業，産業，法制度等</p> <p>(2) 文化的・精神的側面 遊び，祭り，自然観等</p> <p>(3) (1)と(2)の横断側面 マイナー・サブシステム 自然保護活動(NPO)等</p>	<p>フェーズ1 概況調査：地域環境史を調査 ・郷土資料(町史等)の資料調査</p> <p>フェーズ2 基礎調査：かかわりの実態調査 ・住民自治会，郷土館等への聞き取り調査</p> <p>フェーズ3 詳細調査：かかわりの関係論的分析 ・漁業従事者等への聞き取り調査，参与観察</p>

1) フェーズ2 基礎調査(かかわりの実態調査)

塘路湖流域の人々と自然とのかかわりの実態について、経済的かかわりとしての生業と、精神的かかわりとしての遊び、その中間的かかわりとしてのマイナー・サブシステムに着目した。本稿においては、経済的かかわりとしての生業についての調査結果を示す。漁獲種および漁獲量の変遷については既存の文献資料はない。そこで、聞き取り調査によって入手した塘路漁業協同組合の内部資料を基に作図しこれを元に、漁獲種および漁獲量の変遷について、塘路漁業協同組合に聞き取り調査を行った。本稿ではヒシについて示す。ヒシの実は塘路のアイヌの呼び名で、べかんぺという。平成15年から採集の記録があるが、聞き取り調査からは、塘路漁業協同組合が設立される以前から採集されており、漁業権も当初よりあった。分布域は、近年、広がってきているという。湖底が泥の湖岸域が生息に適しているため、塘路湖への泥の流入が増加するに伴い、分布域が拡大していると、漁業従事者は考えている。また、分布域や採集量の変化だけでなく、歴史・文化的な意味合いも変容していることが明らかとなった。塘路湖ではアイヌの伝統文化として、ヒシの実(べかんぺ)の採集が昔から共同でおこなっており、解禁前には湖の神様へ感謝と採集の無事を祈るべかんぺ祭りが執り行われていた。しかし、昭和30年代にアイヌの伝統文化としての祭りの伝承は途絶え、地域の祭りとして続き、昭和40年代以降は、べかんぺ祭りは地域の祭りとしてよりも、観光資源としての意味合いを強めていった。その後、昭和49年

にべかんぺ祭りは休止された。アイヌの伝統文化が観光資源化したことに対する反発があったことが推察される。昭和 60 年頃に、一時、地域住民だけの祭りとして復活したが、平成 2 年には再び休止となり、現在も休止のままとなっている。べかんぺは採集という生業の観点からは、経済的にかかわりの位相を示す生物種と考えられるが、べかんぺ祭りという観点からみると、アイヌの伝統文化から地域の祭りとしての精神的なかわりという位相とその通時的な移り変わりや、観光資源としての経済的にかかわりへの変容があることが明らかとなった。

2) フェーズ 3 詳細調査（かかわりの関係論的分析）

様々なステイクホルダーが保全すべきと考えている複数の価値が対立する〈環境問題〉の現場において、その対立構図を分析し、協働による〈環境問題〉の解決への道筋を立てるための社会文化的な環境評価軸を用いた人文社会科学的なモニタリング手法を検討した。〈環境問題〉の現場で行政施策を実効する際に、行政側と地域住民側のそれぞれの立場が保全すべきと考えている生物種を、ここでは新しい環境評価軸として「かわり指標種」と提案し、塘路湖の〈環境問題〉を事例として、その抽出と人文社会科学的なモニタリングを試みた。価値対立の構図は、生物多様性の保全の観点からの貴重な生物種の保護を目的とする〈生態価値〉と、地域の歴史文化を受継ぎ生活を営んでいくという漁業資源の保護の観点からの安定した需要のある生物種の保護を目的とする〈生業価値〉という構図であり、それは保全すべき生態系像の違いを生んでいることが明らかとなった。

かわり指標種を抽出した次の段階としては、生態価値と生業価値を二項対立させるのではなく、保全すべき生態系像の重ね合わせを目的とし、新たな価値の創出が可能となる道筋を探っていくためのかわりの関係論的分析へと人文社会科学的なモニタリングを展開することが考えられる。塘路湖におけるかわり指標種であるヒシとべかんぺ、ウチダザリガニとニホンザリガニを事例とした〈環境問題〉の人文社会科学的なモニタリングによって、生態学的な科学知に基づいて自然環境を評価する行政や専門家にとっての〈環境問題〉と、歴史や文化的な背景を伴った生活知に基づいて自然環境を評価する地域住民にとっての〈環境問題〉との間で、そもそも「何が、なぜ問題なのか」という認識が異なっており、更に、互いの違いを認識できないままに対策が実施されると、協働による環境問題の解決が阻害されてしまう具体的様相が明らかになった。また、かわりの実態を把握し、人々と自然との関係性の分析を定式化するために、人々と自然との関係性の指標となる行為を、「かわり指標行為」と定義し、図示の方法論を検討した。

第4章 「人間－自然系」の生活知と科学知のあらたな関係性の検討——倫理を育む環境評価にむけて——

最後に、「人間－自然系」の生活知を用いた社会文化的な環境評価軸を検討することによって、従来の環境評価の理念と手法の何を問い直さなければならないのか、倫理を育む環境評価における生活知と科学知のあらたな関係性にむけて、今後の課題を整理した。